

『副社長の紳士的な熱愛』

著：名倉和希

川：逆月酒乱

左手首にはめた腕時計をちらりと見て、原田千紘は現在時刻を確認した。

午前十時を五分過ぎたところだ。ボストン空港発の旅客機は、ほぼ定刻どおりに成田空港に到着したと聞いている。そろそろ迎えのハイヤーが本社玄関前に着くはずだった。

千紘は本社ビルのエントランスにずらりと並んだ重役たちの端にいる。妙な緊張感が漂うなか、隣に立つ秘書室長が小声で話しかけてきた。

「原田君、くれぐれもラザフォード氏のこと、頼むよ」

「わかっています」

「君のことだから、そつなくアテンド役をこなしてくれるだろうが」

はあ、と上司の口からため息が零れる。それを聞き流し、千紘は挨拶をすませたあとのことを考えた。

千紘が働く一ツ木薬品という会社は、中堅規模の製薬会社だ。創業六十年、同族経営を続けてきた。会社独自のヒット商品は少ないが、一般的な総合感冒薬や頭痛薬、胃腸薬などの品質に定評があり、堅実な経営を続けてきた。四代目社長が無謀な投資でもしないかぎり、会社が危うくなることはないだろうと、のんびりした空気が漂っていた。

それが年明けすぐに、アメリカに本社を置くラザフォード・コーポレーションという多角的企業に買収された。

一般社員たちにとっては寝耳に水だったが、創業家一族と大株主たちは、昨年後半からの株の買い占めの動きに気づいていたという。しかし、気づいていたからといって、対抗策がすぐに打てるわけもない。あっという間に株の五十パーセント以上がラザフォード・コーポレーションのものになってしまい、筆頭株主となった。

ラザフォード・コーポレーションは創業三十年ほどで、もともと、調剤に必要な機器を製造、販売している会社だった。病院や調剤薬局に販路を持っていた同社は、数年前から製薬の分野に手を広げ始めた。欧米で手広く商売をしていたのだが、日本には進出していなかった。

一ツ木薬品の買収は、おそらく日本での販路を獲得するためのものだろう、というのが経済界の見方だ。

その予想を裏付けるように、一ツ木薬品の社員は解雇されず、そのまま勤務することが許された。四代目社長も追い落とされることはなかったが、オーナー社長ではなく雇われ社長になった。

そのラザフォード・コーポレーションから、副社長のエドワードが来日する。創業者である現社長の長男のエドワードは、日本が初めてらしい。彼のための専属アテンド役として、千紘が指

名された。

指名してくれたのは、エドワードの末妹、アレキサンドラ・ラザフォード。通称アレックス。

アレックスは一週間ほど前から来日して業務連携作業にあたったラザフォード・コーポレーションの本社社員チームの中にいて、千紘は彼女の目に留まったようだ。

秘書室の中で、千紘は一番英語が堪能で、沉着冷静のうえに気配りがうまいと評価をもらった。それは素直に嬉しい。

日米の業務を連携するのは面倒事が多い。薬の生産と販売について、国によって法律や習慣が違う。それについて、千紘はずいぶんと通訳として活躍した。本社社員チームの健康状態にも気を遣い、気分転換のための提案をしたり宿泊先のホテルに差し入れをしたりと、気づいたことはすべてやった。

秘書として一ツ木薬品に入社して四年。若輩者ではあるが、そうした自分なりの仕事に対する姿勢を認められると嬉しい。世界的企業の副社長がどんな人物かわからないが、そのアテンド役を、精いっぱい、務めようと思っている。

ラザフォード・コーポレーションのウェブ公式サイトによると、エドワードは三十五歳。独身のイケメンだ。掲載されている写真は好感度の塊で、栗色の髪と瞳から柔らかい印象を受ける。けれど首から肩にかけてはとてものがっしりしていて、スーツの中身は逞しい筋肉が詰まっているのだろうと想像させた。

さらに少しでも情報を集めたいとラザフォード・コーポレーション社員チームにエドワードの人物像を尋ねたら、「厳しいけれど人間味があって、正當に評価してくれる人」と返ってきた。アレックスは、「仕事はできるから副社長として信頼している。でもプライベートではわりとぼんやりしている」と、褒めているのか貶しているのかわからない評を口にした。

誰に聞いてもあまり悪い話は聞かなかった。エドワードが副社長になってから業績が伸び、社員たちの待遇も悪くない。大企業の重役というだけでなく、ラザフォード家は元から裕福で上流育ちなのに、とても気さくな人柄らしい。

(好感が持てる人だといい……)

たとえ気難しい人物であっても対処する覚悟はある。自分の職場に関わる重要なポジションにいる人だ。できれば人間的に好きになれる人であってほしいというのは、欲張りだろうか。

千紘はゆっくりと深呼吸して平常心であろうと努めた。選ばれたと舞い上がってはいけない。いつものように、冷静に、相手をよく観察して、ゆっくり丁寧に喋るように心がけよう。

秘書は天職だと思っている。

高校時代は憧れの従兄と同じく製薬の研究者になりたかった。しかし千紘の頭脳は明らかに文系だった。理系進学を諦めて泣く泣く文系に進んだが、そこでゼミの教授や講師陣の雑用を引き受けているうちに、自分の特性に気づいた。細々とした書類整理やスケジュール作成、誰かのためになにかをしたいという性格は、裏方作業に向いているのではないかと思った。それで製薬会社の秘書業務を希望することにしたのだ。

買収されても変わらずに秘書業務が続けられるのは幸運だと思う。できればこのまま働きたいので、与えられた任務を果たしたい。エドワードにはぜひ充実した日本滞在期間を送ってほ

しい。

「あ、おいでなすったぞ」

秘書室長がぼそっと呟いた。透明ガラスの自動ドアの向こう側に、黒塗りのセダンが停車した。こちらが手配したハイヤーだ。助手席から素早く降りてきた外国人の男は、おそらく同行してきたラザフォード・コーポレーションの社員。彼が後部座席のドアを開けると、がっしりとした体格の長身の男が降りてきた。

エドワード・ラザフォードだ。

ウェブサイトに掲載された写真のと通りのイケメン。栗色の柔らかそうな頭髪は自然にウェーブがかかっている、瞳も同じ色。マッチョというほどではないが、オーダーメイドらしいスーツの下にはやはりしっかりと筋肉がついているように見えた。

単なる創業者の息子というだけでなく、ハーバード大学を卒業した秀才だという。精力的に製薬分野に業務を拡大しているのは、このエドワードらしい。たしかに、一見して生命力が漲っているのが感じられる人物だった。

(すごく、素敵だ)

千紘はついそんな感想を抱いてしまった。写真を見てルックスが好みだと思ってはいた。実物はそれよりも数倍は魅力的だ。外国人が特別に好きというわけではない。けれど嫌いでもない。洋画を観て、この人いい、と軽く思うのと一緒だ。

千紘はゲイだ。誰にもカミングアウトしていない。初恋は従兄で、想いをずっと胸に秘めたまま生きてきた。片想いの辛さや苦しさを紛らわせるため、ほかの誰かとセックスする気にはならなくて、二十六歳になるこの年まで誰とも肌を合わせたことがない。

きっとこのまま年老いていくのだろう。両親はすでに亡く、兄弟もいないが、寂しいとは思わない。千紘には仕事があるし、親代わりに親身になってくれた伯父夫婦もいる。

ハリウッド映画のアクションスターのような外国人がこんな近くに、と舞い上がりそうになり、密かに深呼吸した。運のいいことに、千紘は感情があまり顔に出ないたちだ。これも秘書に向いていると思う点だった。

「はじめまして、ニホンノ、ミナサン。ワタシハ、エドワード・ラザフォード。ヨロシクネ」

これだけは覚えてきた、とでも言いたげな照れくさそうな笑顔で、エドワードが並んでいた重役たちに挨拶をした。パチパチパチとまばらな拍手が起こり、端から順番に握手をしていく。

千紘の前にエドワードがやって来た。先に握手をすませていた秘書室長が、千紘をアテンド役だと紹介してくれる。

『はじめまして、ミスター・ラザフォード。私は秘書室のチヒロ・ハラダと申します』

『ハラダ、よろしく』

握手した手の大きさに軽く驚く。間近で対峙すると、身長差は十センチ程度なのに、それ以上の差を感じた。筋肉がつきにくい体質の千紘が、ほっそりしているからだろう。

『ミスターが快適に過ごせるよう、精いっぱいのことをしたいと思っています。なんなりとお申しつけください』

栗色の瞳が微笑んだ。『期待している』と言い残し、エドワードは重役たちとともに会議室へ

移動する。秘書室長のあとについて、千紘も会議室へ入った。

会議室にはアレックスたち、ラザフォード・コーポレーションの社員チームがすでに来ていて、PCのセッティングをすましていた。

『兄さん、無事に着いてよかったわ』

歩み寄ったアレックスをハグし、エドワードは微笑んで『元気そうだ』と声をかける。

『東京の食事は美味しいの。ずっとここにいたら太っちゃいそう』

『それは大変だ』

兄と妹の気安い会話を、ラザフォード・コーポレーションの社員チームの者たちは聞き流している。彼らにとっては珍しいことではないらしい。

全員が席に着くと、エドワードが英語で挨拶をした。それを千紘の上司である秘書室長が通訳する。四代目社長が立ち上がり、長々と挨拶を始めると、エドワードはころあいを見計らって中断させた。

『日本式の挨拶は、私にはあまり必要ないようだ。今日中に話し合うべきことを先にすませよう。時間が惜しい。日本では残業は美徳かもしれないが、私はそうは思わない。定時を超えても抱えた仕事が片付かないのは、その社員の能力不足だし、人手不足なのだと思う。私は間違ったことを言っているか？』

エドワードは皮肉っぽく言いながらも、自分よりずっと年長の重役たちに対して軽蔑するような色は見せない。上から押しつけすぎない、下手にも出すぎない、微妙な匙加減だ。

『私はこのヒトツギという会社を潰すつもりはない。ラザフォード・コーポレーションが日本へ進出するための重要な足がかりになってもらいたい。とはいえ、経営方針や事業展開については、こちらのやり方を多少は取り入れてもらわなければ困る。意味がわかるかな？』

重役たちは通訳係の室長をちらちらと見ながら、戸惑った様子で頷く。

了承を得たと判断したか、エドワードがアレックスに目で合図を送った。すると室内の照明が落とされ、正面のスクリーンにグラフが映し出された。すぐにアレックスの説明が始まる。

室長がフル回転で通訳を務めるのを、千紘は気の毒に思いながら見守った。

日本市場の現状と、一ツ木薬品の業績、厚生労働省の動き、そしてラザフォード・コーポレーションの目標などが、アレックスによって解説されていく。合間に出されるエドワードの質問は明確で、鋭い。千紘はさすがだと感心した。

重役たちの中でも反応が分かれた。実情を把握して仕事をしている者と、創業家一族の出身でお飾りの重役になってしまっている者。千紘は彼らの行く末が見えるようだった。エドワードはきっとこの場のことをあとで役立てる。伊達に世界的大企業の副社長をやっているわけではないだろう。彼も創業者の息子ではあるが、お飾りではないのは一目瞭然だ。

現場のほぼすべてを把握しているアレックスとのやり取りは白熱し、千紘は感動するほどだった。予定どおり、この日の会議は二時間で終了した。エドワードは室長を連れてアレックスとともに会議室を出ていく。研究施設へ行くことになっていた。千紘は本社に待機だ。

秘書室に戻るとすぐに、同僚が声をかけてきた。

「ラザフォード家の長男、どうだった？」

三つ先輩の顔をちらりと見て、千紘は自分の席に着き、PCを立ち上げる。

「サイトで見た写真と同じでした」

「そういうことを聞きたいわけじゃないって。相変わらずクールだな、原田は」

ため息まじりにぼやき、千紘から離れていった。仕事中の雑談は無駄だと思うほうなので、同僚が早々に諦めて離れていったことにホッとする。

まずは宿泊予定のホテルにあてて、メールを送信しなければならない。エドワードが予定どおりに来日したこと、ホテルに向かう時には事前に必ずフロントに連絡するので、ウェルカムドリンクや装飾の花など、再度チェックをお願いしたいことなどをしたためて送った。

するとすぐに返信があり、エドワードの荷物が届いていること、なにか変更点があったらコンシェルジュが速やかに対応するのでなんでも言ってほしいことが書かれていた。さすが外資系高級ホテルだ。海外のVIPレベルの客の対応は心得ている。

(夕食はどうするんだろう)

旧態依然としている重役連中は接待のための会食をしたいようだったが、エドワードは断っている。社員や役員を今すぐリストラするつもりはなくとも、先の短い年寄りたちと仲良くするつもりはないようだ。

(アメリカ人だし、あの体格からして、肉かな)

ホテル内にいくつか飲食店が入っているが、千紘はエドワードの要望に応じられるように、移動時間三十分以内の範囲でいくつかの飲食店をピックアップして話を通してあった。

夜の東京を観光したいと言いだした場合にも、いろいろとプランを作っている。長時間フライトのあとなので疲労を訴えたら、リラクゼーションルームにすぐ入れるよう、ホテル側と話もついていた。

(あの人を喜ばせてあげたい)

千紘はエドワードの笑顔を思い出し、ごく自然にそう思った。

[#ここから中央] ◇◇◇ [#ここで中央終わり]

「サクラが咲いていないな」

成田空港からの道すがら、エドワードはハイヤーの窓から外を眺めながら呟いた。エドワードと並び、後部座席に座っている第一秘書のクラークが「もう五月ですから」と答えた。

「五月でも咲くだろう？ 本国を発つ前にネットニュースを見たら、どこかの公園が満開で、花見客で賑わっているとあったぞ。あれはフェイクニュースか？」

「副社長、日本の国土は細長いのです。ご存じでしょう？ 北と南ではサクラが咲く時期がずれます。そのニュースはどの地方の公園のことを報じていましたか？ たぶん東京よりもずっと北ではないですか」

「地名までは見ていなかった……」

「サクラを楽しみにしていたのでしたら、残念でしたね」

クラークは子供を宥めるような温い目でエドワードを見た。

副社長第一秘書のクラークは、四十五歳になるベテランだ。元は現社長であるエドワードの父の秘書だった。かつては豊かな金髪をきれいにセットしていたクラークだが、今は両耳の上にわずかに残るだけ。運動全般が苦手らしく、年相応に脂肪がついてきた体を、食事制限でなんとかしようと努力中なのを知っている。

「どこまで北上すればサクラが見られるのかな」

買収関係ですでに何度か日本を訪れているクラークに質問してみる。

「さあ、どうでしょうね。これから行くヒトツギ薬品の秘書課の者に聞けば、わかるのではないですか。副社長用にアテンド役を用意したと、アレックスから連絡が来ましたから」

「アテンド役？ 買収した企業の秘書にそんなことを頼むのか」

「私もそう思ったのですが、アレックスがどうしてもと言うので……。私と別行動になる副社長のことが、心配なのではないですか。もしアテンド役になにかありましたら、すぐに解任すればよろしいでしょう」

「……そうだな」

アレックスは末妹の愛称だ。本名はアレクサンドラという。

エドワードは四人弟妹の長子で、すぐ下に弟、次に妹、一番下にアレックスがいる。上の妹は早くに結婚し、夫の転勤に子供とともについて回っている。今どこの国にいたかな、とエドワードは首を捻った。弟は大手の保険会社に入り、現在はNY本社に勤務していた。弟妹の中で自分と末の妹だけが、父親の会社で働いていることになる。アレックスは勤労意欲の塊で、エドワードの下でよく働いてくれていた。

数年前に会社の方針として製薬分野に乗り出すことを決め、各国の中堅会社を買収してきたが、率先して動いてくれているのはアレックスだ。今回も日本へ派遣するチームメンバーを選抜する際、アレックスが一番に手を挙げた。

子供のころ、アレックスは紅茶色の髪と瞳が美しい、少しはにかみ屋の可愛らしい娘だったのに、今は髪をベリーショートにし、ろくにメイクアップもせずにパンツスーツで颯爽とオフィスを闊歩している。仕事が趣味とでも言いたげに、生き生きとした顔を見せて。

アレックスは二十九歳だ。大学生時代はそれなりに恋人がいたようだが、最近はまったく聞かない。会社のために夢中で働いてくれるのはありがたいが、エドワードにとっては可愛い妹だ。自分の幸せを見つけてくれてもいいんだぞ、と心の中でいつも思っている。本人には絶対に言わないが。余計なお世話だと不愉快にさせてしまうのは明らかだ。

そもそもエドワードも色っぽい話とはもう何年も無縁だった。二十代のころは忙しい日々を送りながらも付き合っている女性がいた。しかし三十歳になったころ、父親から会社の半分ほどの経営を任されてしまい、副社長という肩書きまでつき、とてもプライベートを充実させる余裕がなくなった。クラークはそのときにエドワードの元へ来た。『よく働くから頼りになるぞ』と父親から譲り受けたのだ。

ほとんど自然消滅のように恋人とは終わり、以来、五年も色恋沙汰とは縁がない。

だが最近、ふと恋人が欲しいなと思う瞬間がある。現在の立場に慣れてきて、余裕が生まれたのかもしれない。それとも、弟に決まったパートナーができたと聞いたからだろうか。

弟のアーサーはハイスクール時代にゲイだと家族にカミングアウトした。両親もエドワードも妹たちも驚いたが、大切な弟の勇気ある告白を受け入れて、家族全員がアーサーの味方だと結束を強めた。

アーサーはモテるようで、特定の恋人が欲しいと公言しながらも、享乐的な付き合いばかりを続けていた。家族はみんな心配していたものだ。

ところが去年の夏、日本支社に赴任したときに、日本人青年と恋に落ちた。両親に恋人の写真を送ったのも初めてなら、滞在先のホテルとはいえひとつの部屋で寝起きし、同棲状態にあったというのも初めてだ。

つい先日、NY本社へ戻ることになり、驚いたことにその恋人を連れていったという。それほど真剣なのだろう。喜ばしいことだ。落ち着かなかったアーサーがついに生涯の伴侶を手に入れた。次は自分か、とエドワードが無意識のうちに思ったとしてもべつにおかしくない。

だが今までエドワードは恋愛にうつつを抜かしたことがなかった。この人となら生涯をともにしたいと決意させるほどの愛とは、いったいどんなものなのだろうか。一生わからなくとも、たぶんべつに困りはしないだろうが……。

(仕事が楽しいのがいけないのだろうか)

自嘲気味に笑い、エドワードはごちゃごちゃとした印象の街並みを眺める。東京の人口密度はかなりのものらしい。ただでさえ広くない国なのに、国土の七十パーセント以上が山林だという。ここに一億人以上も住んでいるのだ。

日本国内で中堅規模の一本木薬品を買収した。これを足がかりにどこまで業界に食い込んでいけるか。すでに承認されている医薬品はもちろんのこと、未承認のものもどんどん認めさせて日本国内に流通させたい。

エドワードには自信があった。自社の製品はクオリティが高いし、欧米各国で実績もある。アレックスをはじめとする社員たちは有能だ。絶対に日本でも成功するだろう。

「副社長、そろそろ到着します」

クラークに声をかけられて、エドワードは前方に視線を移した。十階建ての古ぼけたビルの敷地に車が入っていく。創業六十年というから、この自社ビルはずいぶん前に建てられたのだろう。けれど建物の周囲には新緑が美しい植木が並び、ゴミひとつ落ちていない。エドワードの来日に合わせて掃除をしたのかもしれないが、それでもよい心がけだと思う。

ビルのエントランスロビーにずらりとスーツ姿の男たちが並んでいた。待っていてくれたらしい。一人ずつ握手をしていき、最後にスリムな青年と対峙した。

「はじめまして、ミスター・ラザフォード。私は秘書室のチヒロ・ハラダと申します」

年寄りばかりが並ぶ中、一人だけ若い。エドワードのためのアテンド役だった。すっきりとした顔立ちとまっすぐに見上げてくるきれいなまなざしは、邪心をまったく感じさせない。握手した手もほっそりとして白く、けれど女性っぽさはない。

漆黒の髪は前髪がやや長く、軽く横に流している。ちらりと見える額は丸みを帯びていて、そ

こだけ子供っぽさを感じた。露わになっている耳は小さくて、耳朶だけがほんのりと赤みを帯びているのは緊張しているからだろうか。

これぞオリエンタルビューティ、といった印象を受けた。

その後は重役たちと会議室に移り、アレックスたちとも合流し、具体的な業務についての話し合いになった。その場に原田は同席していなかった。

次に顔を見ることができたのは、その日に予定していた仕事が終わってからだった。

アレックスが秘書室に声をかけ、原田を連れてきた。

「ハラダ、兄をよろしくお願ひします。日本は初めてなの」

「承知しております」

にこっと原田が笑った。仕事用だとわかる笑みだが、不快ではない。

「さて、ミスター・ラザフォード。これからどうしますか？ 食事でしたら何店舗かピックアップしていますし、お疲れのようでしたらいったんホテルに移動しましょう」

「……そうだな、まずは食事にしようか」

「なにが食べたいですか？」

原田がサッと差し出したのはファイルで、中には各国の料理店が写真付きできれいにファイリングされていた。秘書としての必須能力である、情報の整理はうまいようだ。とても見やすくプレゼンテーション能力もあるらしい。

「君はどこがお薦めなのかな」

「日本食がご希望でしたら、このあたりですね。ミスターの空腹具合はどうですか？ こちらだと軽く、こちらではわりとガッツリと。あと、アルコールはワインがお好きだと聞きましたが、日本酒を試してみませんか？」

いろいろと薦めてくるが、押しつけがましくなく、かつ自分がエドワードのなにを知りたいのかははっきり言葉にしてくれるところがいい。

「お腹は空いている。機内食を昼に食べて以来、コーヒーしか口にしていないからね。そうだな、初めての日本だから、日本食をまず攻めてみようか。だが寿司はいらない。実は生魚が苦手なんだ。絶対に食べたくないというほどではないから、ビジネス上で必要ならば相手に合わせて食べることはできる。けれどプライベートでは避けたい」

「わかりました。覚えておきます。では、今夜は居酒屋に行ってみましょうか。メニューが豊富ですし、とっておきの日本酒を揃えている店があるんです」

原田に促されて、エドワードは本社ビルをあとにした。

その夜は、とても楽しい時間を過ごせた。原田が連れていってくれた居酒屋はうるさすぎず静かすぎず、ちょうどいい雰囲気、料理はどれも美味しかった。メニューだけではなにがなんだかわからないので原田に任せてみたら、エドワードの食べ方を見てどんどん好みを把握していき、中盤以降は苦手だと感じる味付けや食材のものは一切出てこなくなった。

さらに、料理に合う日本酒を店員と相談して飲ませてくれ、エドワードはSAKEの魅力にはまった。

ご機嫌で店をあとにし、タクシーでホテルに向かった。荷物はすでに最上階のスイートルーム

に運ばれていて、常温の水がちゃんと用意されていた。水の銘柄も、エドワードが愛飲しているものだった。

ほろ酔いのエドワードの目に、原田の微笑は神々しく映った。リビングのソファに体を投げ出すようにして座り、水を飲む。

「君は素晴らしいアテンド役だ」

「ありがとうございます。ミスター、シャワーは明日の朝になさったほうがよろしいでしょう。今夜は長時間フライトのあとですし、疲労もあって酔いが回っているのだと思います」

「そうだな、このまま眠ってしまいたいくらいだ」

暑苦しさを感じてネクタイを緩めようとしたが、うまくいかない。「失礼します」と一言断ってから原田がエドワードのネクタイを解き、首から抜いてくれた。

「ベッドまで歩けますか？」

「肩を貸してくれ」

自分よりも二回り以上は体格が劣る原田に支えてもらい、エドワードはなんとかベッドに移動できた。ベッドルームには爽やかな香りのアロマがほんのりと焚かれている。高級リネンのシーツが、酔いで火照った肌に気持ちいい。

「ミスター、それではまた明日。おやすみなさい」

耳元で原田の声を聞いたような気がしたが、エドワードは睡魔に秒殺されて、深い眠りに落ちていった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>